



国際図書館連盟 (IFLA) バンコク大会に参加して

北野 康子*

図書館関係者の間では IFLA で通っている International Federation of Library Associations and Institutions は、1927年に設立された。ハーグに本部があり、1,600以上のメンバーが、150以上の国から参加している。その第65回年次大会が、1999年8月20日から28日までバンコクで開催された。アジアの開催では、フィリピン、日本、インド、中国に続いて5番目である。ソーシャルワーカーの友人から、図書館員は国際連盟の大会を毎年開くのかと言われたことがあるが、情報は新しくなければならない。グローバルな情報は資源である。また、戦争や争乱は国際会議の敵である。モスクワで開催された年はクーデター騒ぎで、団体で参加した日本人が3日目に帰国した。

大会の登録者数は、117カ国、2,237名であったそうであるが、日本からの参加者は36名になっていた。ロシアからも60名以上の名前を見たが、なんらかのグラントをもらえたに違いない。会場は、BITEC (Bangkok International Trade & Exhibition Centre) であった。予定していた比較的中心地のホテルでは、費用の面で開催できなくなったそうである。経済危機の影響で、タイ図書館協会は苦勞をしたのだ。特に、最近あったモーターショーが華やかで、お金をかけたものだったらしいので、図書館の会議は、地味であったに違いない。だが、タイの図書館関係者は言うだろう。「シリントーン王女が2日間も来て下さった」と。会議場では寒いほどであったが、2週間ぶりに職場へ戻ったら、電気工事のために冷房の無い図書室のものすごい暑さが待っていた。

マンモス会議では、プログラムをよく調べて、出席するセッションをうまく選ぶこと、発表のペー

パーを集めること、訪問のライブラリーを選ぶこと、展示会場をよく見ること、できるだけ多くの参加者と話すことが、今まで参加した、東京、ナイロビ、ストックホルムの IFLA、およびその他図書館に関する国際会議参加のノウハウみたいなものである。ライブラリーでは、Siam Commercial Bank と、テレビ局のビデオのデータベースを見た。また、アジア経済研究所の図書資料部の人と新装なった NIDA (National Institute of Development Administration) の図書館へも行った。雑誌の欠号をコピーするので、次の日にもう1日行くというのは、アジア経済研究所だからできることで、国立大学図書館の収集方法では、とてもできないことである。

IFLA には、5つのコア・プログラムがある。資料の保存と保護、出版物の普及、国際書誌調整と国際 MARC (Machine Readable Cataloging)、国際データ流通とテレコミュニケーションおよび、第三世界の図書館振興である。また、IFLA の活動は8の部会に分かれており、そのうち、3部会は図書館のタイプ (例えば公共図書館) を、4部会は図書館活動のタイプ (例えば書誌調整) を取り扱い、もう一つは地域活動の部門で、アフリカ、アジアとオセアニア、ラテンアメリカとカリブ海域の図書館情報サービスを取り上げる。ダカール、バンコクおよびサンパウロにオフィスがある。元タマサート大学図書館の館長 Dr. Pensri Guaysuwan は、バンコクのオフィスの仕事をしている人である。大会のプログラムは、これらの部会が、さらに分科会とラウンド・テーブルに別れているので、複雑である。大学/研究図書館、書誌、目録、収集と蔵書構成、逐次刊行物、政府刊行物、統計、分類と索引などがあり、また、視聴覚資料、図書館史、女性問題、利用者教育というようなラウンド・テーブルもあった。

開催国を反映して、“Asian Serials: Problems

* Yasuko Kitano, 京都大学東南アジア研究センター; Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

and Issues” や, “Rare Books and Manuscripts: the Southeast Asian Dimension” など, 東南アジアに関するトピックが多かった。ISEAS (Institute of Southeast Asian Studies) の “Government Information and Information about Governments in Southeast Asia: a New Era” や, “A Window on the World: Newspaper Collecting in the National Library of Australia” は, その豊富なコレクションを背景にしていた。オーストラリアの図書館員は熱心だった。アジア経済研究所の図書資料部の人や, 国会図書館のアジア資料課の人とはよくいっしょに

なった。とても全部聞くことは不可能で, 最後のまとめのセッションでは, 聞かなかったセッションのことが抜け落ちていて, 分からない部分があった。日本人は, 英語の分からなかった所も, 欠け落ちてしまう。アジア・オセアニアの次期の委員には, 欧米およびオーストラリアのアジア・オセアニアのスペシャリストが選ばれ, Asian Development Bank の白人の女性が, アジアの人はだれも居ないじゃないかと言った。第三世界の図書館の振興とは, 先進国から見た図書館の振興なのであろうか。